

C 1 明治期の女子教育と育児思想(第1報) — 明治18年~21年 —
昭和女大家政 浮須婦紗

目的 母性喪失現象の顕現化する現代において、母性の育成と女子教育の相関を再考し、あわせて、近代育児思想史としての研究を目的とする。

方法 女子教育を意識的、急進的に推進した明治中期に出版され、当時の代表誌として著名な『女学雑誌』を研究資料とし、第1報は創刊年次である明治18年より、大日本帝国憲法発布前明治21年までを一区分とし、当時の社会情勢、女子教育論を背景に、母性の啓発と育児観を考察した。

結果 ①明治18年代 — 社説「女教の維新」に代表される如く、女子教育論のようやく活発化しはじめた時代、育論論としては特に「乳のます母親の心得」と題して、母親の心情と乳汁との関係の重大であることを説諭している。②明治19年代 — 社説「女子の参政及高等教育」に代表される如く、女学校、婦人公が急速に発展した時代、育児論としては特に「母親の心得・愛育と云ふ事」と題して、子どもに対し愛情表現をゆたかにし、一家内平和喜樂にして家庭教育を親密にするよう説諭している。③明治20年代 — 社説「女学校の論」に代表される如く、女学校の乱立を憂慮し、真の女子教育を問われた時代、育児論としては特に「母親の責任」と題して、保守の念を強調し、急進の弊をいましめ、賢母としての修養を説諭している。④明治21年代 — 社説「将来の日本人民」に代表される如く、国家主義的女子教育論が展開された時代、育児論としては特に「家庭の母」と題して、上帝を信じ、同朋のために死し、正義高德のために全身を犠牲にする子どものびる日本人民を育成すべき母親の義務を説諭している。